ナナカマドの挽歌

地獄を見た母・愛と痛恨の手記

秋庭ヤエ子

恒友出版

ナナカマドの挽歌

地獄を見た母・愛と痛恨の手記

秋庭ヤエ子

恒友出版

著者　あきばヤエ子
昭和6年7月12日　北海道空知郡美唄町の三菱鉱業所住宅で生まれる。
現在　北海道健康増進センターに勤務し営業課長。
自宅　旭川市川端町11丁目

ナナカマドの挽歌　——地獄を見た母・愛と痛恨の手記——
昭和54年1月20日　発行　980円
昭和54年12月25日　第21版発行
著　者　秋庭ヤエ子
発行者　斉藤　繁人
発行所　恒友出版株式会社
東京都港区六本木3—15—22
〒106　TEL03(402)1631(代)
印刷・製本　誠之印刷株式会社

0036—079011—2291
©YAEKO　AKIBA

〈序にかえて〉

TBSテレビ「モーニングジャンボ・奥様八時半です」司会者　宮崎　総子

はじめて秋庭ヤエ子さんにお会いしたとき、私は暖かく、やさしく、美しくそして明るくさえあるヤエ子さんに、とまどいを感じました。

この明るさは何だろう……二十七年の歳月が「実子殺し」という罪を忘れさせてしまったのだろうかと思いました。しかし、それは違っていました。お話を伺うにつれ、ヤエ子さんの心の奥の傷は深くこそなれ、けっしていやされるものでない事が分かったのです。

当時のヤエ子さんは、確かに弱く悲しい母だったのです。ただ同じ情況に直面した場合、誰が同じ弱く悲しい母にならなかったと、自信を持って言えるでしょうか……。

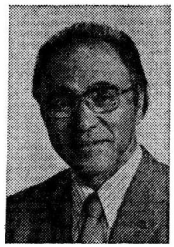
19歳の若妻を取り囲む環境は、それほど、過酷で悲惨なものだったのです。しかしヤエ子さ

んはその事で自分を正当化し、自分の罪の苦しみから逃げようとはしませんでした。二十七年間、罪の重さ、悲しさ、苦しさを一人で受けとめてこられたのです。

ヤエ子さんの豊かさは、その中から培われたものである事を知った時、私は人間とは何であるかを教えられた様な気がしました。

ご出版を心からお祝いするとともに、「寿子ちゃん」のご冥福をお祈り致します。

旭川医師会々長
北海道健康増進センター社長　森山　元一



私と秋庭ヤエ子さんとのおつき合いは、もう二十五年にもなる。今にして思えばその頃のヤエ子さんは、幼い信夫君を拘えて昼も夜も必死に働いていたのだが、当時のヤエ子さんが置かれていた不幸な逆境には、周囲の誰も気付かなかった。それだけ、彼女は若くて素晴しく美しかったし、彼女自身もきわめて朗らかに振舞っていたようである。

だが私は、何か彼女の胸中には、秘められた苦しみや哀しさが漂っているようでならなかっ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

た。

ある時、「ヤエちゃん、君は何か淋しいものがあるね」と、それとなく話しかけたところ、酒席ではハシャグだけハシャグ陽気な彼女が、私の前で初めて真面目な顔になり、「わかりますか……恐ろしい人ですね先生は」といって、ポツリと話し始めたが、私はそれを遮って昔話は止めた。

「誰だって辛い想い出はある。それを悲しむよりそれを乗り越えて、現在と未来を大事にしようや」

もうそれ以上、その話をする事はなかった。そのヤエ子さんの辛い想い出が本になった。本当に胸を打つ文章だ。私は彼女の気持ちを大事にしたいと思う。

その後、ヤエ子さんの一人息子が骨折で私の病院に入院をした。そのときの甲斐々々しい看病ぶりと、周囲の人々への配慮を今でも覚えているが、あれからもう十数年になる。

五年前、アスレチッククラブの創立に際して、株主・会員とその家族の身になってくつろいだ雰囲気を作り出す責任者を探していた。市議の小柳、宮川の両氏が「ヤエちゃんが良い」と推選してくれた。

私は名前を聞いた途端に同感して、三人で彼女が勤めていたスナックへ行った。強引もこれ以上の強引さはないほど、三人で口説き落として来てもらった。現在、メンバーズルーム担当

の営業課長さんである。十数人の部下の先頭にたって、素晴しい仕事ぶりである。
そのヤエ子さんが本を出した。ヤエ子さんの一生は波乱に富んでいる。そして、その一瞬々々を真面目に生き抜いて来た彼女が、自ら記した文章には暗い影はない。
読者にコビない文章というのは、読んでいて実に気持ちが良いものだ。

装幀
カット　田中成利
新ローマン派会員
旭川市在住

ナナカマドの挽歌　目次

まえがき　宮崎　総子
まえがき　森山　元一

宿命と流浪の日々

宿命の産声……10
美唄の哀歌……15
大寒の絶叫……21
草むらの涙……28
流浪の日々……37
晩夏の記憶……44

事件のあとさき

若者のうた……54
炭住の花嫁……61

地獄の道標……67
痛恨の時間……75
苦渋の軌跡……83

ナナカマドの赤い実

時雨の吐息……90
山村の人情……97
大雪の母子……103
山の弁天様……109
離婚の成立……119

告白の朝

再会の風景……128
記者の回想……134
わが父の涙……140
安住の旋律……146

白銀の歓喜……154
喜びの戸籍……159

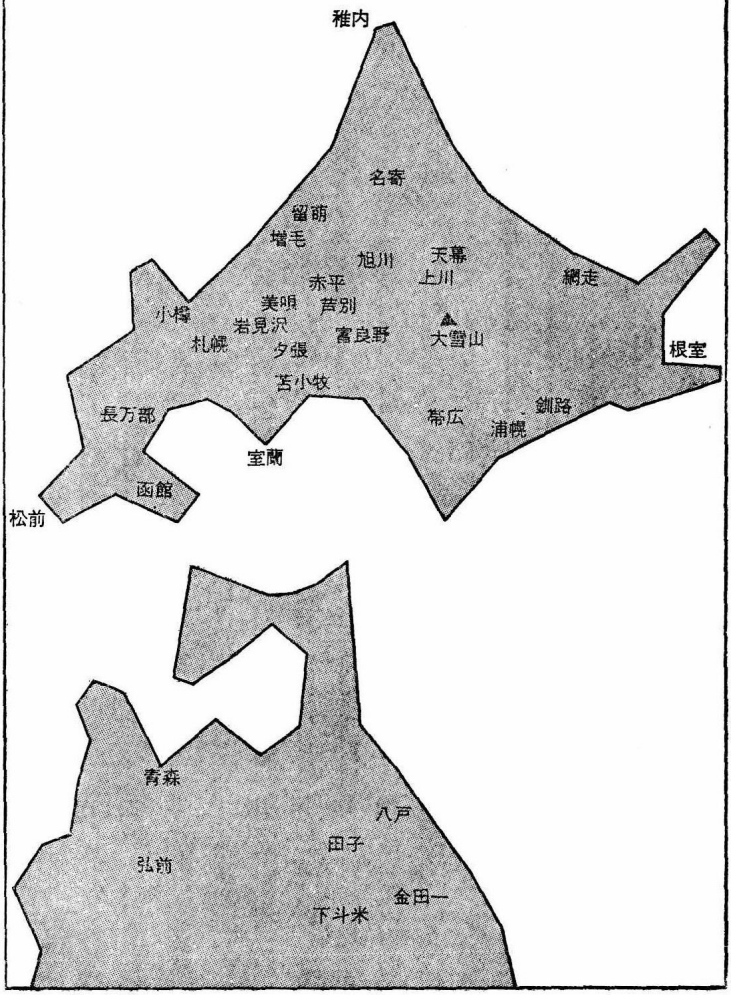
よみがえった虹

廃車の祝杯……170
感謝の日々……177
寿子の再来……185
感激の祝宴……191

少し長いあとがき

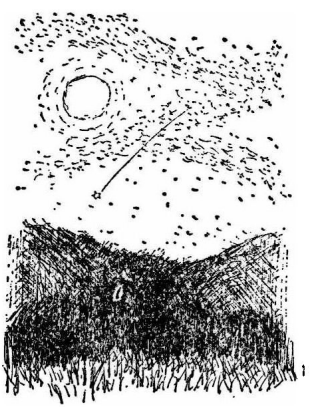
自費出版……198
テレビ出演……205
母を語る……217
おわりに……220

本書に登場する地名の略図



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

宿命と流浪の日々



宿命の産声

北海道の空知地方は、かつては日本有数の炭鉱地帯でした。その中の一つに、美唄炭鉱がありました。函館本線の列車が札幌から旭川へ向かう途中の美唄駅から、東のほうへ山を入ったところにあり、最盛時には人口四、五万人を数えたという大きな炭鉱です。炭鉱で働く坑夫たちが住む住宅を炭住といい、全国どこでもそうだったのでしょうが、美唄の炭住も例外ではなく、バラックに毛の生えた程度の粗末なものでした。

北国に遅い夏がやってきた昭和初期のある日。埃だらけの積木を乱雑に並べたような美唄の炭住の、八軒長屋の一角で、真白なエプロンや割烹着をつけたおかみさんたちが、一軒の家を出たり入ったりしていました。やがてお産が始まろうとしているのです。

その家の主人秋庭文次は、追い出されたような恰好で外にいて、

「どうせ俺の子じゃない。何も心配することはねえんだ」

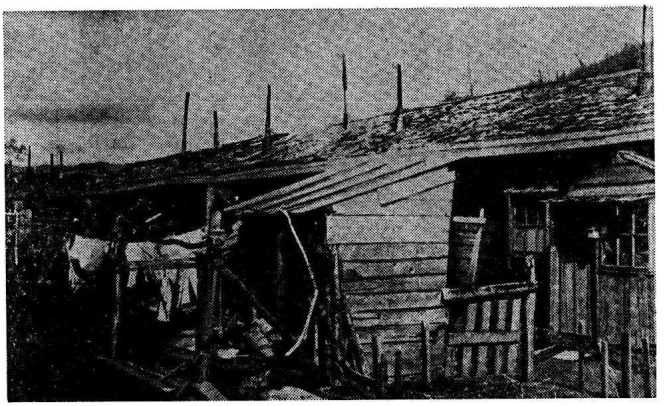
と、腹の中では思うのですが、やはり気が気ではありません。手にした焼酎をちびりちびり飲みながら、ときおり家の中を覗いてみるのです。そして、流されるままに生きてきた自分の半生を、舌打ちをしながら振り返っているのでした。

文次は、明治二十九年十一月二日、青森県東津軽郡野内村大字野内字菊川というところで生まれました。いまでは青森市に編入されているようです。秋庭家の家柄は士族で、文次は中学校へも入れて貰ったのですが、生来の放蕩癖からいつの間にか学校へは行かなくなり、あげくの果てには家を飛び出してしまったのです。

一度結婚しましたがすぐに離婚し、カヨと再婚した大正十年前後は北海道の函館の近辺に住んでいました。八百屋をやってみたり、行商をやってみたり、いろいろな仕事に手を染めましたが、何をやってもうまくいかず、北海道の各地を転々とした末に食いつめてしまい、美唄の炭鉱に住みついたのでした。

カヨはどんなに辛いことや苦しいことがあっても、文次のもとを離れて実家へ帰ることはできませんでした。夫のある身で文次に惚れてしまったからです。嫁ぎ先はもちろんのこと、もうどこにも行く先はなかったのです。カヨの実家は、函館の在で竹籠などを扱う店だったといいます。カヨの父は、そんな娘と文次を烈火の如く怒り、

「他人の女房に手を出すような奴に碌なものはいない」
と、何度もカヨを連れ戻すのですが、夜中になると、カヨは二階の窓から帯を垂らし、それを伝わって文次のもとへ走ったのだそうです。
美唄の炭鉱に住みついてからも、文次は思うにまかせぬ身を嘆き、世の中の不況に腹を立てて焼酎ばかり飲んでいました。炭鉱へ来る前に、あまりの苦しさから自殺を図ったこともあったようです。山の中へ入って、木の枝で首を吊ろうとしたのです。
ところが、たまたまその場所へ山菜を採りに来た老婆に見つかり、
「そんな死に方をしては、それこそ犬死だよ。どうせ死ぬなら炭鉱で死にな」
と言われ、自殺を思いとどまったということです。当時、炭鉱で死ぬと千円の見舞金を貰えたのだそうです。大正の終りから昭和のはじめにかけての千円ですから、大そうな金額です。それで炭鉱に行く気になったのですが、同じ坑夫でも組夫と呼ばれ、身分の保障などはまったくありません。そのうえ、文次は気が小さい男で、せっかく炭鉱へ働きに来たのに、暗い穴の中へ入るのが恐くて仕方がなかったのだそうです。
カヨとの間には一男三女をもうけていましたが、そんな調子ですからしょっ中出稼ぎに行っていました。それも家を出たっきり、二カ月も三カ月も、ひどいときは半年も一年も、凧の糸が切れたように音信不通のまま帰らないことも珍しくなかったのです。そんな夫でも帰ってく



炭住の八軒長屋（北海道新聞社提供）

ると、カヨは文次のために小ざっぱりした座布団をこしらえてやるような女でした。

「どうせ俺の子ではないのだ」と文次がつぶやいたのは、自分が留守の間にカヨが身籠もってしまったからなのです。夫が出稼ぎに行った留守の間は、カヨは大勢の子供を抱えて必死に生きたのでしょうが、夫から碌な仕送りがなければ、あるいは食うためには他人の情けにすがらなければならなかったのかもしれません。悲しく腹立たしい話ですが、文次にしてみれば、わが身の不甲斐なさを焼酎でごまかす以外に、どうしようもなかったのです。

やがて隣家のおかみさんが、

「女の子だよ」

と声をかけると、文次は焼酎で赤くなった顔を照れ臭そうにゆがめながら、

「済まねえなあ、世話になったなあ」
と、家の中へ入ったのでした。炭住の八軒長屋は六畳が二間だけの薄暗いもので、カヨはその奥の部屋に寝ていました。カヨは文次と顔を合わせると、申し訳なさそうに眼を伏せるのでした。
「何はともあれ、親子とも無事でよかった」
文次は口には出してみますが、やはり腹の中では面白くなかったのでしょう。
「俺の留守にできやがって……。ヤイ、コノヤロウ」
つい赤ん坊に向かって怒鳴ってしまったのです。だが、カヨには「ヤイ、コノヤロウ」が「ヤエコ」と聞こえたのでしょう。嬉しそうに、
「あなた、ヤエですか、ヤエコですか。もう名前をつけてくれたんだね」
と言ったということです。
こうして、赤ん坊は人並みに「ヤエ子」と命名されました。昭和六年七月十二日、北海道空知郡美唄町字美唄三菱鉱業所我路(がろ)ノ沢十二号三舎で、私は生まれてはいけない星の下に生まれてしまったのです。

後年、年老いた私の父秋庭文次が、涙ながらに聞かせてくれた話です。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com